

リレー随想

四歳の時に小児マヒにかかり、家内は今でも歩くのが少し不自由だ。

手の筋力も通常の人以上は少し弱い。子どもと腕相撲をして、子どもが小学校の低学年までは勝っていた。三、四年生のときは勝ったり負けたりだったが、中学生となった今では勝負にならない。

そんな家内であるが、仕事をしている。職場で少しでもみんなの役に立ちたいと思ったらしく、早めに出勤して、みんなのためにお湯を沸かしておくことを始めた。

といっても、別に大したことではないのだ。電気ポットに水を入れて、みんなが出動してくるのを待っているだけなのだ。が、「少ない労力の割には、喜ばれるとたいねえ」と、張り切っていた。自分の役割を見つけた子どもにも似て、ちょっとした生きがいにもなっているようだった。

家内の職場は大所帯で、来客や休憩時間などのお茶で、お湯の消費も多く、何度もポットの

利便性で失うもの

土地家屋調査士

田口 一法さん



で今まで使っていたのが古くなったので、新しい電気ポットを購入したそうである。

「今まで使っていたポットは二リ入りだったから、洗面所でお湯を入れて、廊下を渡って休憩室までどうにか運べたけど、今度新しく五リも入るようなのを買わしたとよ。元気な人でもよくやく運べるくらいで、私にはとても無理」と、家内は苦笑いしていた。

大所帯であれば、それくらいあった方が便利はいいだろう。世の中が進んで便利になり、五リも入るような電気ポットを、安く手に入れることができるようになったことを喜ぶべきなのだろうが、何かが違うような気がする。

ポットでお茶を頂くという恩恵に浴することは、簡単に便利になっているが、大きさや重さが、利用する側の限度いっぱいで作られていられないか。元気なときにはいいが、年を取ったとき、弱ったとき、その便利さが圧迫感として、のしかかることになりはしないか。

「けど、こうしたことや、どう考えたらいいんだろうね」

結論を出し切れないうまま、私と家内は顔を見合わせ、苦笑いした。

「あのお手伝いができなくなつた」
仕事から帰るなりガツカリして言っているので聞いてみたら、職場